創刊15周年記念
新連載

東京・日本橋〜京都・三条大橋

東海道五十三次を往く

第一回

慶長5（1600）年に徳川家康の命により整備された五街道のひとつ、東海道。翌年、日本橋から京都三条大橋まで、五十三の宿場が設けられ、そこで旅人や物資を送り継（次）ぐことになった。ミスモ編集部では、創刊15周年を記念して、旅人が歩んだ「東海道五十三次」を京都までめぐる一大プロジェクトをスタート！

Start

日本橋
慶長8（1603）年、江戸幕府の始まりと同時期に架けられた。現在の姿は明治44（1911）年、完成したもの。

「日本橋」の文字は、最後の将軍、徳川慶喜によるもの。

日本橋

昔も今もにぎわう東海道の起点

東海道のはじまり、日本橋。当時はここに魚河岸があり、今と変わらず経済の中心として栄えていたという。「京都まで503粁（km）」、橋のたもとの里程表を見て、期待に胸が高鳴る。銀座へ向かう道筋にはブランド店が立ち並び、街道の面影はほぼないが、銀座発祥の地や、創建時の橋の親柱が今も残る。新橋を越え、徳川家の菩提寺、芝の増上寺や、赤穂浪士が眠る泉岳寺を過ぎると江戸も見納め。江戸の出入口として設けられ、旅人の見送りの場であった高輪大木戸跡を後にして、いよいよ品川宿へ。

高輪大木戸跡
江戸の南の入り口として、東海道の両側に石垣を築き、夜は木戸を閉めて治安維持と交通規制を図った。

デパートや老舗宝飾店が並ぶ街では最近、外国人の旅行者も「銀ぶら」を楽しむ。

銀座発祥の地
銀座の地名は、徳川幕府が同地に設置した銀貨幣鋳造の銀座役所にちなむ。

京橋
今はなき京橋の、明治・大正の姿を偲ばせる親柱。

品川宿

下町情緒あふれる道で幕末の息吹を感じる

日本橋から約8㎞に位置する品川宿は、東海道の最初の宿場。東に魚介が豊富な品川浦、西には紅葉の名所・御殿山があるため、行楽に江戸庶民が押し寄せ、遊郭も発展。当時、宿内の家屋は1600軒、人口7000人規模でにぎわっていたという。今でも、北品川の八ツ山口から鈴が森口までは江戸時代と同じ道幅のまま。土産物屋や食事処が軒を連ね、通りには新撰組が滞在した宿「釜屋」跡や黒船来航時の砲台跡など見所が数多く、幕末の時代を感じながらたどることができる。

品川宿入口には、しながわ観光案内所があり、ガイドが見所を教えてくれる（土・日・祝のみ）

土蔵相模跡
高杉晋作や久坂玄瑞らが密議をし、幕末史の舞台となった「土蔵相模」（旅籠の相模屋）の跡。

涙橋
鈴ヶ森刑場に向かう罪人が渡った浜川橋、通称「涙橋」。

浜川砲台跡・新浜川公園周辺
新浜川公園前の河川敷からの眺め。公園には、ペリー再来航時、土佐藩が造った浜川砲台の大砲がある。

品川本陣跡
品川宿は、東海道五十三次の第一番目の宿駅として、本陣を構え、参勤交代の大名たちや公家、僧たちなどでにぎわった。

鈴ヶ森刑場跡
慶安4（1651）年に設けられた鈴ヶ森刑場の遺跡。隣接には、処刑者の供養のために建てられた大経寺が。

二十歳の龍馬像
ペリー来航時、品川にあった土佐藩下屋敷警備のため、坂本龍馬も動員された。

品川寺（ほんせん）
大同年間（806～810）開創の品川最古の寺。明暦3（1657）年に鋳造された大梵鐘は、明治4（1871）年のウィーン万博出展後に行方不明になり、大正8（1919）年にジュネーブの美術館で発見されたため、「洋行帰りの鐘」ともいわれている。

食

かつては海が広がり、浅草海苔がとれた品川宿。当時を偲ばせる品川宿そば（980円）は、ピリ辛のつけ汁で。

そば処いってつ
☎03-3471-3842
品川区北品川1-30-23
営11時30分～14時／17時30分～22時、日・祝11時30分～15時　休水曜

細長いあられに海苔を巻いた品川巻。品川が海苔の産地であったことから、命名された。全国に同様のものがあり、名前もさまざまだが、やはり品川が本家本元に思われる。

あきおか　☎03-3471-4325　品川区北品川2-2-8
営10時～19時30分、日・祝10時～18時30分
休火曜

おみやげ